



特集

知っていますか？
キャリアセンターのこと。

知っていますか？ キャリアセンターのこと。

本校の校舎の一角に、年間のべ1000人の学生が訪れる場所がある。

その名も「キャリアセンター」。学生の就職支援の拠点だ。

卒業後、どこでどのように働くのか。どこで働くのか。

学生たちの思いを引き出し、彼らの挑戦を後押しする職員たちの仕事に迫る。



photographs by Noriko Yoshimura



1 十三キャンパスだけでなく、箕面キャンパスでも面談を受けることが可能 2 「こんなに寄り添ってもらえると思わなかった」と語る菊川さん。キャリアセンターを利用し、志望企業の内定を獲得した 3 バスケットボールコース1年生に向けた就職説明会

本校のキャリアセンターでは、中西さん、森さん、今堀さんの3人の専任職員がキャリアサポートを行っている。その仕事内容は、個別のカウンセリングや面接練習、履歴書の添削、就職先の開拓まで多岐にわたる。また、本校は医療、スポーツ、トレーナー、外国語と専門分野の幅が広く、学生たちの就活の時期や目指す道も多様だ。その分、一人ひとりに適したサポートが必要になるが、職員たちには、どの学生と面談する際にも大切にしていることが一つある。

「こちらから押し付けるのではなく、学生自身が考えて動くことを重視しています」
そう語るのはキャリアコンサルタントの資格を持ち、人事畑の経験も豊富な中西さん。言葉の背景には、自分のことを自分で決められない学生が多いという実感がある。本校に入学するまでは、周囲の勧めや指導で進路を決めてきた学生もいる。いざ就職活動を始めても、自分に向いている仕事、したいことが分からない。それを見つけ、自分の言葉で語れるよう、学生に質問を繰り返し導くのが、本校の就職サポートの特徴だ。

「武器のようなものを手渡したい」

それでは実際、職員たちはどのように学生から言葉を引き出しているのだろうか。森さんは、最初から就活の話をするのではなく、雑談から始めるという。
「初対面ではなかなか言葉が出てこないのが、趣味や興味のあること、近況などを聞き、まずは距離を縮めていきます。面談を繰り返して、私も学生も本音を話せる場所にしていく。たとえば、選考が進んでいる、表情がいつもと違うと感じたら『本当はどう思っている?』と立ち止まって一緒に考え直します。それで振り出しに戻ることになっても、できる限り就職先とのミスマッチがないようにしたいので、引っかかりを見落とさないようにしています」

学科コースの教員とは異なる立場だからこそ、見つけられる学生の強みもある。今堀さんが大切にしているのは、客観的な視点だ。

「学校での勉強以外にも、これまでやってきたことを詳しく聞いていくと、本人が気づいていない魅力が見えてきます。それを伝えると、言葉があふれてくることがあります。学生たちは普段、自分自身を肯定されることはあまりないと思うんです。就活の時はこちらなのですが、その先の人生でも『あの時、ここがいいところだと言われたな』と思いついて元気が出る、武器のようなものを手渡したいと思って話しています」
キャリアセンターを利用し、脊髄損傷者専門のトレーニングジムに内定が決まったサッカーコースの菊川大聖さんにも話を聞いた。

「今回の就職活動で、人生で初めて自分で進路を決めました。理学療法士などの医療資格を持つスタッフが多い環境に、今はまだ知識のない自分が飛び込むことになるので、初めはとても悩みました。定期的にキャリアセンターに通い、寄り添っていただいたおかげで、最終的に自分で決断できました」

後悔する学生を減らしたい。

年々面談の件数は増えているが、サポートが必要な学生全員が訪れている訳ではないと、中西さんたちは感じている。「もっと早く来ていれば」と後悔する学生を少しでも減らしたい。そんな思いで、学科コースごとに低年次から就職説明会を実施し、キャリアセンターの開室時間を増やすなど、学生にとってより身近な場所となるよう取り組みを続けている。

「卒業後、どんな人生を歩みたいのか」が既に決まっている人は、そこに辿り着くための方法を探しに。まだ分からない人は見つけるための第一歩を踏み出しに。本校のキャリアセンターを、ぜひ訪れてみてほしい。